

マルコの福音書三章31—35節をめぐって

宮村 武夫

マルコ三章31—35節で、主イエスの家族に関しマルコは興味深い記述をなす。

一九七三年、J・D・クロッサンは、この個所を含めイエスの親族に関するマルコの描写について、いわゆる編集史の方法に基づく検討を発表した。^① その中でこの個所の編集目的を探り、単にマルコの共同体内部における論争ばかりでなく、エルサレム教会の法的、教理的指導権に対決する宣言と見ている。^② これに対し、J・ランブレヒト、E・ベストが反論している。^③

更に、J・D・クロッサンが自らの提唱の根拠とした説の主張の一人、田川建三自身、一九六八年の『原始キリスト教史の一断面』^④に引き続き、一九七二年『マルコ福音書上巻』^⑤を著わし、この個所についても、たとえば、「イエスの肉親はエルサレムから来た律法学者と同程度にイエスと対立しているのである、という痛烈な批判を志している」と述べている。^⑥

以上の諸見解を考慮しつつ、マルコ三章31—35節で、マルコは何を意図しているか探るのが、この小論の目的である。

一 マルコ三章31—35節の構造・文脈

マルコ三章31—35節理解の出発点は、マタイ、ルカ両福音書の並行記事と比較し、現在あるがままのマルコのテキストに則し、その構造・文脈の特徴を見出すことである。^⑦

マタイの並行記事十二章46—50節では、マルコ三章21節に対応する部分を欠き、主イエスの家族登場の目的が明白でなく、確かに不意な訪問との感を与える。^⑧ また、マタイでは、「イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた」(49節)とあるように、マルコとは違い(三章32、34節)、主イエスとの対比を、直接には弟子たちに限る。^⑨

ルカは、「イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群集のためにそばへ近寄れなかった」(八章19節)と、マルコもマタイも言及しない事柄を述べ、また「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のこゝばを聞いて行なう人たちがす」(八章21節)と、マルコの「神のみこころ」、マタイの「天におられるわたしの父のみこころ」と違う表現をなす。^⑩

しかし、最も大きな相違は、各福音書の前後関係、文脈についてのそれである。マタイでは、マルコ三章29節に相当する十二章32節の後、33節から46節の部分があり、その後にマルコ三章31節に対応する46節が来る。しかし両者いずれも、この記事の直後に種蒔きの譬を置く。

これに対し、ルカでは、種蒔きの譬との順序が、マルコやマタイの場合と逆になる。また、この記事の直後に、マルコでは種蒔きの譬に続く四章35—41節の部分結び付ける。

以上見た並行記事との相違を考慮し、現在あるがままのマルコのテキストの特徴として、少なくとも次の点を見る。第一は、三章31—35節が20—34節と固く結び付く点。これはマルコ特有の構造である。つまり、三章21節で、

主イエスの家族が一度登場した後、22—30節までいわば挿入の部分、そして再び32節へと続く、いわゆるABAのサンドイッチ型を取る。これは、マルコの特徴的な表現方法で、神経の行き届いた構造を見せる。^⑩

更に、注目すべきは、三章13—19節と三章20—35節の結び付きである。マタイの場合、十二弟子選出の記事は、十章1節以下にあり、弟子派遣における主イエスの勧告、派遣の記事などを含め、十二章46節以下の並行記事までの間に様々な事柄を置く。ルカの場合も、六章12—16節の十二弟子選出と八章19節までの中間に、かなり多くの記事が入っている。それ故、マルコの場合、三章13—19節を20—35節と密接な関係に置くのは注目に値する。

二 マルコ三章31—35節理解の手掛り—イエスの家族、弟子、群集—

次に、マルコ三章31—35節において、主イエスの家族、弟子、群集の描写をそれぞれのよう受け止めるべきか検討したい。これは、この個所の理解を左右する大切な手掛りである。

1 主イエスの家族

エルサレム教会で主イエスの兄弟ヤコブが重要な位置を占めていたとの主張は、J・D・クロツサンが使十二7、十五3、二一18、Iコリ十五7、ガラ一19、二9、12またヤコ一1などを列挙している通り、^⑪確かに聖書的な根拠がある。しかし、この主張と、ヤコブや他の者が主イエスの家族であるとの理由で権威を確立し、「エルサレム教会の権威主義をになつていた『イエスの兄弟』の集団」を構成していったとの想定は区別する必要がある。

果して、主イエスとの家族関係の故に、何らかの意味で権威を主張した集団がエルサレムに存在していたのであろうか。また、ヤコブがエルサレム教会で重要な位置を占めた根拠は、主イエスの兄弟の故であらうか。この点に関し、カンペンハウゼンの論証は説得力がある。ヤコブが重んじられるに至ったのは、主イエスの兄弟である故ではない。全く別の理由によると見る。では、その理由は何か。それは、主イエスの復活の証人の故である。復活の後、主イエスはヤコブにご自身を現わした。この顕現は、ヤコブの回心ばかりでなく、召命の時でもあったに違いないとカンペンハウゼンは考える。主イエスの復活の証人としての立場こそ、ヤコブの重要性の根拠であって、主イエスの兄弟の故ではない。この主張は、聖書の宣言する事実に基づくものではないか。

また、ヤコブはエルサレムの「監督、大司教また祭司長ではなかった」^⑫し、ヤコブの従兄弟シメオンが「何らかの公的、世襲的な意味で、ヤコブの継承者であったことはあり得ず、……初代教会において、統治者のハリハ統治または世襲的継承の概念は全く存在しなかった」とカンペンハウゼンは論証している。

カンペンハウゼンの説得力ある論証を受け入れるとすれば、マルコ三章31—35節をエルサレムにある主イエスの家族集団に対決する宣言とみなすのは、根本的に無理になって来る。^⑬

2 弟子

マルコは弟子の役割をいかなるものとして描いているのか。この課題は、研究者の関心を引き付ける。^⑭一つの見解は、マルコは弟子たちを否定的に描くと見るものである。福音書の読者たちが弟子たちの側に立つのではなく、これと対決することをマルコは期待しているとの見解である。^⑮

しかし、上記の見解とは別に、マルコが描く弟子たちは、主イエスを真に理解するに遅く、また盲目であるとしても、マルコ自身や福音書の読者にとって、依然最初の弟子として存続し、弟子たちの中にマルコは教会の姿を見てい

ると主張する者もある。^②この立場の实例として、E・ベストの見解を検討してみたい。

マルコが描く弟子たちの姿が必ずしも理想的なものではない事実をE・ベストも十分認める。^③しかし群集の姿、また律法学者やパリサイ人たちの描写と比較して、「弟子たちの姿を描くことにより、自らの共同体内部または外部の或るグループをマルコが攻撃し、そのグループやその見解に対し読者に警告していることとは出来ない。勿論、マルコは史的弟子たちに攻撃を浴びせていない」と判断し、一般的に言つて、弟子たちは共同体全体を意味すると考えられる。^④それ故、弟子たちの失敗や誤解の描写を通し、その現実を乗り越える神の愛と力強さを提示し、同じ問題に直面している読者たちにマルコは励ましを与える、これがE・ベストの理解である。^⑤この見解を実証する具体的な箇所として、マルコ十三章37節を注目する。つまり、「わたしがあなたがたに話していることは、すべての人に言っているのです。目をさましていなさい」とあるように、十三章に提示する主イエスの教えは、元来ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレではなく、主イエスに従う者すべてを対象とするとして、「マルコの福音書における弟子たちの役割は、共同体の模範としてのそれである」とE・ベストは結論する。

ところで、十三章37節と基本的に同じ主張を、三章35節の「神のみこころを行なう人はだれでも」との表現にも見られる。つまり、十三章37節において、ペテロ、ヤコブ、アンデレ、ヨハネばかりでなく、主イエスに従う者すべてを対象とする広がりを示すのと同様、三章13-19節に見る十二弟子の選出と三章20-35節の箇所を意図的に並べ、十二弟子ばかりでなく、「神のみこころを行なう人はだれでも」と同じく広がりを見せるマルコは示しているのではないか。^⑥

3 群集

三章20、32、34節などから見て、この個所で群集の存在を確かに強調している。それ故、主イエスの家族、弟子た

ちとともに、群集の役割をどのように受け取るかが、大切な鍵となる。幾つかの見解を検討したい。

まず、P・ミネアールの興味深い考察について。^⑦マルコの福音書各場面における聴衆にP・ミネアールは細心の注意を払い、群集の具体的用例を検討して、マルコは主イエスに従う群集に対し重要な役割を与えていると要約する。^⑧

この群集は、傍観者や漂流者など雑多な人々ではなく、信仰を持った継続的な聴衆により構成されていたと見る。^⑨更に弟子と群集の区別と両者の関係に推察を進め、マルコの福音書の最初の読者たちの場合、教会の指導者たちは自らを弟子たちと同一視し、平信徒は群集に一体感を持ったと想定し、相互の異なる役割と互いの依存を認め、荒野で群を養い得る唯一の大牧者に対し各自が責任を自覚する助けをマルコは与えたとP・ミネアールは考える。^⑩いずれにしても、弟子と群集は区別されるが、両者は相互に依存し、対立関係にあるとは見ていない。

同じく弟子と群集を区別し、群集の立場や役割を重視する見解であっても、田川建三の場合は、「32節、34節の『群集』が群れ集まっている人々ではなく、『民衆』としての位置を獲得する」とし、弟子と群集の間に区別ばかりでなく、対立をも見る。しかし区別を越え、対立を見るのは少なくともこの個所では困難ではないか。^⑪

他方、E・ベストは、弟子と群集を区別し群集の位置を重視する見解に対して否定的である。弟子と群集に関するマルコの描写を比較検討し、「弟子は、『群集』の一部ではなく、元来群集から導き出されたとは言え、別のグループであり」、「群集は、宣教の対象とされる漠然とした特色のはっきりしない集団」と見、「弟子たちが非難されているとは言え、群集が称賛されているわけではない」とE・ベストは主張する。

以上諸見解を通観した結果として、二つの点を確認したい。

(1) 群集と弟子は区別されるが、必ずしも対立するものではない。まして、弟子が全く否定され、群集がそれに取って代る存在として描かれていると見るのは無理である。

(2) 主イエスを中心とする、主イエスと弟子たちの交わりは群集へ広がって行く。そのため、群集は新しい、広がり行く弟子を構成する可能性を持つ者として重視されている。

以上、主イエスの家族、弟子、群集をめぐる検討から判断して、J・D・クロッサンや田川建三のマルコ三章31-35節に関する提唱は受け入れ難い。

三 マルコ三章31-35節の意図

マルコ三章31-35節について、J・D・クロッサンや田川建三の提唱を受け入れられないとすれば、この個所でマルコは一体何を意図しているか見るべきであろうか。

まず、J・ランブレヒトの理解を見たい。マルコは、主イエスの母や兄弟達に関しより正確な、また付加的な情報を伝えようとしているのではない。キリストに従う者は自らを捨て、十字架を負い(八章34節)、召された者として親族から離れる必要があること(十章29、30節)を、主イエスご自身の模範を通してマルコは読者に訴える。これが、J・ランブレヒトの理解である。三章31-35節でマルコはキリスト者、教会のあり方を教えていると見る点、この理解は興味深い。しかし、キリスト者、教会の進むべき道は、必ずしも家族から離れることでないことを、マルコ自身明示している(五章19節)。

次に、E・ベストの見解。マルコ本来の興味は、教会内部の一グループ攻撃という消極的なものではなく、真の弟子の本質を積極的に提示することであるとE・ベストは見る。では、真の弟子の本質について、何をマルコ三章31-35節は提示しているのであろうか。主イエスが家族から阻隔されたように、マルコの共同体も同じ経験をする。彼ら

の家族も、彼らがキリスト者になった時、気が狂ったと考えたに違いない。しかし、過って不信仰であった主イエスの家族も、今や主イエスを信じるに至っている。同じことが彼らの家族にも起り得るとマルコは励ます。更に、血縁関係を断ち切られても、主イエスとの間に新しい霊的結び付きを与えられ、またマルコ十章29、30節に約束されているように、新しい神の家族の一員として相互を見るようになる。以上がこの個所でマルコが意図しているメッセージだとE・ベストは理解する。このようにキリスト者となったため家族から阻隔された者たちへの慰め、励ましとこの個所のメッセージを理解する方が、キリスト者となるため家族を捨てよとの呼びかけと取るJ・ランブレヒトの場合より、マルコの最初の読者たちが既にキリスト者であったことを考えると、より説得力がある。

しかし、E・ベストの理解においても課題は残る。(一)家族から阻隔されたキリスト者に対し、主イエスの家族同様、各自の家族もやがて主イエスを信じるであろうとの約束、(二)今現に、信仰共同体において神の家族として互いに兄弟、姉妹と見る。この両面を見て行くのは、確かに大切である。しかし、この両面の関係をマルコ三章31-35節はどのように示しているのか。この点を考えて行くと、結局、家族と教会の概念を、マルコはどのように関連させているのか、という課題に直面する。

マルコが、家族の重要性に焦点を合わせている事実は注目に価する。その幾つかの実例を検討し、家族と教会の結び付きに関するマルコの主張を理解する手掛りとしたい。

1 一章29-31節

主イエスは会堂にはいつて教え、新しい権威を明示なさった(一章21-28節)だけでなく、「シモンとアンデレの家にはいられた」のである。「シモンのしゅうとめ」は癒され、もてなしに生きる者とされた。一章16-20節の召命の

記事、特に「父ゼベダイを雇い人たちといっしよに舟に残す」との記述は、この個所との密接な関係で、血縁への福音の広がり、具体的な側面を十分考慮し理解する必要がある。

2 三章13—19節

十二弟子任命の記事。弟子の使命の第一が、「彼らを身近に置き」と、彼らの行為、機能ではなく、存在そのものに係わる点、極立つ。構成員各自が何が出来るかの機能ではなく、存在そのものを中心として成り立つ家族の有り方と同じである。十二弟子は、主イエスの家族の交わりに加えられたと見なすことが出来る。

3 五章1—20節

汚れた霊につかれた人は、3節から5節で悲惨な様を有りのまま描く如く、家族から隔離され、全く孤独な生活を送り、遂には自らを滅ぼすに至っていた。主イエスが汚れた霊から解き放った時、その彼が正気に帰った。しかし、主イエスに直接従いたいと願うこの人に、「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい」(19節)と主イエスは求めておられる。ここにも、具体的な家族関係の破れとその回復を見る。

4 五章21—43節

この個所では、十二歳になったヤイロの娘と、彼女が生きたと同じ十二年の年月長血をわずらっていた女を対比的に描く。ヤイロの家族がどれ程深い愛で結ばれていても、死の事実の前に、全く閉じ込められている現実を明示す。

他方、主イエスと長血の女の間には、信仰を中心とした新しい霊的家族関係が成立して行くことを暗示している。しかも、主イエスは、死の壁を打ち破る方として、ヤイロとヤイロの娘の関係をも根元から支えておられる。

5 六章14—29節

六章12節は、内容的には直接30節に結び付く。つまり14—29節は挿入で、十二弟子の宣教活動が展開された地域の事情を浮び上がらせる。この地域の第一の特徴として、支配階級の間で典型的な形で現実となっている家族の崩壊の姿を描く。こうした現実の中で、十二弟子たちは福音宣教を進めて行ったのである。混乱した家族関係を本来あるべき姿へ、これが弟子たちが福音宣教において直面した最大の課題の一つであったことを、この挿入は明らかにしている。

6 七章1—23節

「あなたの父と母を敬え」また「父や母をのしる者は、死刑に処せられる」などのモーセのことば(10節)は、同時に「神のことば」(13節)である。この神のことばを空文としている(13節)エルサレムから来ているパリサイ人たちと幾人かの律法学者(1節)を主イエスは攻撃し、内側から出て、人を汚すもの(20—23節)が、神のことばを空文化することを指摘する。「あなたの父と母を敬え」に集約される家族関係こそ、神のことばが空文化されるかどうかの戦いが展開する最も大切な場なのである。

7 七章24—30節

この記事でも、スロ・フェニキヤの女と娘の家族関係を踏み躪る悪霊を追い出し、真にこの親子を支える方とし

て、主イエスを描いている。

自己のため娘を用いるヘロデヤ(六章14-29節)と対比的に、娘の必要のため執り成し祈る母親。この母親は、パリサイ人や律法学者(1, 5節)、更に弟子たちも(17, 18節)悟り得なかったこと、つまり具体的な家族との係わりの中で神のごとくに生きることとを体現している。

8 九章14-29節

母親ばかりでなく父親も、娘ばかりでなく息子も、自らを遙かに越えた力の圧迫のもとに苦しむ。弟子たちの使命は、主イエスを祭り上げ、この現実に関係に生きることではなく(5, 6節)、ましてや「だれが一番偉いかと論じ合う」(34節)ことでもない。主イエスの言うことを聞く(7節)とは、この圧迫に苦しむ父と息子の解き放ちに参与することである。

9 十章1-12節

あらゆる家族関係の基盤は、親と子だけでなく、更に夫と妻の関係にある。これは、モーセの十戒以前「創造の初めから」一貫している。創世記三章に鋭く描き出している罪の現実によっても少しも変らない。この本来の神のみ旨の中心を、パリサイ人たちがばかりでなく(2節)、弟子たちも(10節)悟っていない。夫と妻、そして家族が「互いに和合して暮らす」(九章50節)平凡な生活こそ、神のみ旨が現実化されて行くための恵みの手段なのである。しかも直後の13節から16節の記事、特に主イエスに抱かれている子どもたちの姿に象徴されているように、夫と妻を中心とする家族は、血縁関係を軽視したり無視したりするのではないが、それに限定されず、遙かに豊かな広がりを持つ神の家

族へと展開される時、確立されて行く。

10 十章28-31節

この箇所は、家族と教会の関係を考える上で重要である。たとえば、J・ランブレヒトは、弟子は親族から離れねばならないとマルコが教えるとする根拠の一つとして、この箇所を挙げる。また、この箇所は、主イエスとの間に確立される新しい霊的絆、つまり神の家族を正面から取り上げるとE・ベストは理解する。確かに、「その百倍を受けない者はありません」との表現からも、30節の約束を文字通りでなく、新しい霊的家族としての教会の交わりを指すと取るべきであろう。しかし、29, 30節の「畑」にも注目すべきである。これは、新しい霊的畑と言うことではなく、文字通り物質的豊かさを示すと取るのが自然である。「迫害の中で」驚くべきことには経済的にも豊かになり、肉の家族も教会の交わりに加えられるとの約束と見るべきではないか。教会は、具体的な肉の家族に限定されないが、常にそれを内に含み得る豊かな存在なのである。

以上幾つかの実例を通して垣間見るように、いずれの家族も、自らの力を遙かに越えた力の圧迫の下に苦しみ、本来あるべからざる状態にある現実をマルコは描く。それ故、根源的に解き放たれ、支えられる必要がある。しかしそうした破れを持つ具体的な肉の家族関係をマルコは軽視も、無視もしない。それぞれ本来あるべき姿に立ち帰らされつつ、しかも肉の家族関係に限定されず、更に豊かな家族、主イエスにあって現実となっている神の家族の存在を指し示す。これらの家族像に見る根本的理解は、三章31-35節の意図を知るためにも光を与える。この箇所では、主イエスご自身の家族を取り上げ、その有りのままの姿を描き、その破れを内に含みつつ、更に豊かな広がりを持つ神の家族の現実へと展開しているのである。

四 結 び

この三章31—35節の意図を、家族の根源的限界、現実的破れを描くマルコの福音書全体の流れの中で、主イエスご自身も自らの家族関係において人々と同じ痛みを経験なさり、真にその破れを身に受けつつ、その限界を「神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです」と新しい礼拝共同体の広がりへと大きく展開しているか。これはあまりにもナイーブな、また矮小化した理解であろうか。

そうは思えない。家族関係は、マルコの福音書を一貫する主題の一つであるばかりでなく、聖書全体の最重要な課題の一つである。たとえば、出エジプトを経験したイスラエルの民が、偶像の海と言われるカナンに入るに際し、最も気をつけるべき課題であったことは、レビ記十八章1—5節などから明白である。

「あなたがたは、あなたがたが住んでいたエジプトの地のならわしをまねてはならない。またわたしがあなたがたを導き入れようとしているカナンの地のならわしをまねてもいけない。彼らの風習に従って歩んではならない。」

(レビ記十八章3節)

エジプトの道。それは、イスラエルの民が底辺で経験した絶対専制政治である。専制的王パロの目的のため、イスラエルの民の基本的人権は無視され、過酷な労働条件のもとに圧迫され(出エジプト記一章11—14節)、遂には子供そのものまで消し去られ、家庭の存在が根底から否定されてしまう。全体主義の恐ろしさ。基本的人権も家庭の存在も、根本的には認めないエジプトの道に帰ることは、断じて許されない。

しかし、カナンの道もまた危険なのである。それは、「あなたの子どもをひとりでも、火の中を通らせて、モレクにささげてはならない」(レビ記十八章21節)とあるように、偶像礼拝であり、それと固く結び付いた性的放縦の道である。特に性的放縦について、レビ記十八章16—23節で細部に渡り鋭い指摘をなす。性的放縦の結果家庭が内部から崩壊し、離婚と結婚を繰り返す、やがて義理の親子、兄弟、姉妹の間で、レビ記十八章6節以下であからさまに描写していることが現実となってしまう。しかし、それだけではない。性的乱れ、家庭の崩壊は、根本的な人間不信に通じ、結局人間と動物との絶対的区別が不明になってしまふ。カナンの道の行き着くところは、レビ記十八章23節が警告する通りである。神と人間の明確な区別が暈されると、人間と他の動物の区別も、もはや明確でなくなり、非人間化の極に達する。これこそ、カナンの道の恐ろしさである。

こうした背景の中で、夫と妻(創世記二章24節)、親と子(出エジプト記二十章12節)の関係を中心にした家庭の確立は、最も積極的な戦いであった。

一九八〇年代を目前にした今、一方では、歪んだ個人主義の行きづまりが目立ち、性的放縦と家庭の崩壊も速度を増して行く恐れがある。しかし他方さらに危険な傾向は、こうした傾向に対する反動であり、全体主義への傾斜である。一九四五年八月十五日の意味を全く無視し、疑似宗教としての天皇制に基づく家族主義の復権が計られる。こうした状況の中で、具体的な家族の破れを支え、全体主義的家族主義のイデオロギーを批判しつつ、家族と教会の生きた関係を求め続け、教会と国家、世界教会による世界宣教の課題に視点を据えつつ進むべき方向を、このマルコ三章31—35節の箇所は指し示すのではないか。

- ① J.D. Crossan, "Mark and the Relatives of Jesus", *Novum Testamentum*, 15 (1973), pp. 81-113.
- ② *Ibid.*, p. 111.
- ③ J. Lambrecht, "The Relatives of Jesus", *Novum Testamentum*, 16 (1974), pp. 241-258.
- ④ E. Best, "Mark III. 20, 21, 31-35", *New Testament Studies*, 22 (1975-76), pp. 309-319.
- ⑤ J.D. Crossan, *op. cit.*, p. 111, Note 3.
- ⑥ 田川建三『原始キリスト教史の一断面—福音書文学の成立』(勁草書房、一九六八年)。以下『一断面』と略す。
- ⑦ 田川建三『マルコ福音書十卷』(新教出版社、一九七二年)。
- ⑧ 前掲書二五—頁。
- ⑨ N. Perrin は、マルコの福音書をめぐる様々な方法論の歴史を概観した後、今日求められているのは、狭く編集史的批評ではなく、広く文学批評であるを主張し、その特徴の「ことごとく」構造の重視を挙げる。N. Perrin, "The Interpretation of the Gospel of Mark", *Interpretation* 30 (1976), pp. 121, 122. E. シンヤマンナー(高橋三郎訳)『マルコ福音書』(Z 新約聖書註解刊行会、一九七六年)五、六頁。W.L. Lane, *The Gospel According to Mark*, Grand Rapids, Michigan, 1974, pp. 25-32. 拙稿「聖書解釈における聖書構造の「ことごとく」」『日本基督神学校校報』61三—五頁参照。
- ⑩ W.E. Bundy, *Jesus and the First Three Gospels*, Cambridge, Massachusetts, 1955, p. 217. E. シンヤマンナー(佐竹明訳)『マタイによる福音書』(Z 新約聖書註解刊行会、一九七八年)三九八頁参照。
- ⑪ 31、32節で親族が外に立ち、32、34節では群集が主イエスの周囲に座すことを二度繰り返す描く故、マルコは場所を手掛りた両者に対する異なる態度を示すと J. D. クロッサンは見、マタイ、ルカの並行記事にならざることを注目する。 *op. cit.*, p. 96.
- ⑫ しかし、マタイの場合も「弟子たちとは、マタイが付け加えた『ことごとく』』という語が明らかになっている。神の意志を行なうのすべである」と E. シュヴァイツァーが指摘しているように(『マタイによる福音書』三九八頁)「すべ」とい

広がる面を無視出来ない。

- ⑬ 田川建三『一断面』二二三頁、マルコの示す具象は消えて、抽象が登場する。マルコの具象には主張がある。ルカの抽象には規定がある。『マルコ福音書十卷』二五〇頁、「この『行為』の内容をルカは狭く宗教的实践に限定する。礼拝の場などで語られること(神の言葉)を『聞くこと』行なう、さうするに主である」。
- ⑭ 協会訳と新改訳の相違に見えるような、三章21節をめぐり問題として、E. Best, *op. cit.*, pp. 311-313. D. Wenham, "The Meaning of Mark III 21", *New Testament Studies*, 21 (1974-75), pp. 295-300 なる参照。
- ⑮ W. レインは、五章21—43節、六章7—36節、十一章12—25節、十四章1—11節などを、その具体例として挙げる。また、この表現上の工夫は、時の経過の指示、緊張関係の劇的高揚、重要な並行や対比への集中などを目的とすると考えられる。 *op. cit.*, p. 137.
- ⑯ ー・ランバントムは、この個所の構造を明解しようと、 *op. cit.*, pp. 251, 252.
- ⑰ J.D. Crossan, *op. cit.*, p. 112.
- ⑱ 田川建三『マルコ福音書十卷』二五二頁。また、二二六頁、二五二頁参照。
- ⑲ Hans von Campenhausen, "The Authority of Jesus' Relatives in the Early Church", *Jerusalem and Rome*, ed. C.L. Lee ("Facet Books: Historical series", 4; Philadelphia, 1966), pp. 3-19.
- ⑳ *Ibid.*, p. 8.
- ㉑ *Ibid.*, p. 15.
- ㉒ *Ibid.*, p. 19.
- ㉓ ヘルサレム共同体における主イエスの親族によるハリオン統治を、自らの想定の根拠として仮定する必要はないと J. D. クロッサンはカンペンハウゼンの論証を無視する。 *Ibid.*, p. 112, Note 1. しかし、ハリオン統治の有無はかりでなく、ヤコフが重要な位置を占めるに到った理由が、主イエスの親族の故なのか、主イエスの復活の証人の故なのか問題なのであり、カンペンハウゼンの論証は無視出来なはずである。
- ㉔ J.D. Crossan, *op. cit.*, pp. 111-113.
- ㉕ *Ibid.*, p. 110, Note 1. E. Best, "The Role of the Disciples in Mark", *New Testament Studies* 23 (1976-77), pp. 377

- ② J. D. Crossan, *op. cit.*, p. 111, Note 1, p. 112. J. Lambrecht, *op. cit.*, p. 256. E. Best, "The Role of the Disciples in Mark", p. 383, Note 3.
- ③ J. Lambrecht, *op. cit.*, p. 256.
- ④ この傾向は、マルコが用いた伝承の中に既に存在し、マルコにおいてその頂点に達し、その後(マタイ、ルカなどにおいて)更に減少して行く。E. Best, "The Role of the Disciples in Mark", p. 392.
- ⑤ *Ibid.*, pp. 390—392.
- ⑥ *Ibid.*, pp. 393, 394.
- ⑦ *Ibid.*, p. 396.
- ⑧ *Ibid.*, p. 399.
- ⑨ *Ibid.*
- ⑩ *Ibid.*, pp. 397, 400, 401.
- ⑪ *Ibid.*, p. 401.
- ⑫ E. Best は、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレではなく、共同体をと理解してゐるようであるが (*Ibid.*, p. 401) 彼らばかりでなく共同体もと取る方が適當と思われる。
- ⑬ マルコ三章20—35章全体の構成を通じ、「十二弟子の集団が全然現れないことは注目に価する。しかもすぐ前の場面に、かなりもったいぶった十二弟子の選びの場面(3・13—19)を設定してゐるのであるから、なお更、ここで十二弟子に言及しないことは注目に価する」と田川建三は指摘し、「マルコがここで敢えて弟子達に言及しないのは、いわば消極的な批判をなしているのである」(『マルコ福音書上巻』二五二頁)と述べる。三章13—19節と三章20—35節の間に鋭い対比を見るか、連続性、広がりを見るかが問題である。対比を見るとすれば、マタイとの関係についても、「マタイは、マルコの叙述から『民衆』を削り取り、その代りに、弟子を導入する。イエスは御手を弟子達の上にかざして言い給うた、『見よ、これぞ我が母、我が兄弟なり』(マタイ12・49)。しかしマタイはこの改ざんによつて、マルコの微妙な構成をおよそおさ(こわしてしまつ)、『前掲書』二五二頁)と言ふことになる。しかし、連続性、広がりを見るとすれば、マタイは異なる表現を用い、強調点も違つが、マルコが暗示的に述べらるる(弟子→群集→新しい弟子の広がり)を明確に述べてゐるのであつて、マタイとマルコの間には根本的な相違はないと言へる。
- ⑭ P. S. Minear, "Audience Criticism and Markan Ecclesiology" in *New Testament and Geschichte* (Oscar Cullman zum 70. Geburtstag; Zürich und Tübingen, 1972), pp. 79—89.
- ⑮ たとえば、四章の記事を考察し、その三つのグループ、(1) the mathetai 人数十二人 (2) 特に限定のない、より多数の *oi aplous* (3) *oi êthnous* を見よ。 *Ibid.*, p. 83. また、十章1節で、ユダヤ宣教をマルコが編集句を用い紹介してゐる点を注目し、この群集と八章以前の群集の連続性をマルコは強調してゐると見よ。 *Ibid.*, p. 86.
- ⑯ しかし、十四章43節、十五章5、11、15節などで、主イエスに敵対する人々を指すことから、「群集」ということばはマルコにとって特殊な専門語になつてゐないと判断する。また五章24、27、30、31節、十二章41節など、偶然その場に居合せた傍観者を意味する場合もある。 *Ibid.*, p. 87.
- ⑰ *Ibid.*
- ⑱ *Ibid.*, p. 89.
- ⑲ 『マルコ福音書上巻』二五二頁。
- ⑳ 田川建三も、『「断面』二二二—二二三頁では、「……十二弟子の優越する立場はなくなり、イエスを受けられる無名の群集の間に埋没する」と述べ、少なくともこの個所に関する限り、十二弟子と区別されない程群集の立場が高く評価されているとは言つても、群集が弟子と対立関係にあると見てゐないと思われるのは注目した。また、両者の対立をより明確に主張している『マルコ福音書上巻』二五二頁でも、「誰がイエスの兄弟なのか」と問う時に、マルコは弟子達の存在を忘れてしまつてゐる。そして、扱れることになつて抗議してゐるのである。弟子集団に対するこの消極的な抗議が積極的な批判に転ずるのが、次の4章である」とこの個所に関する限り、「消極的な抗議」としか見てゐない。
- ㉑ "The Role of the Disciples in Mark", pp. 377—401.
- ㉒ *Ibid.*, p. 392.
- ㉓ *Ibid.*
- ㉔ *Ibid.*, p. 393.

49 J. Lambrecht, *op. cit.*, p. 257.

50 *Ibid.*, p. 258.

51 E. Best, "Mark III, 20, 21, 31-35", p. 317 参照。新約聖書のすべての文書を論争的なものと見る方法論にE・ベストは疑問を投げ掛ける。どの新約文書に対しても、ガラテヤ人への手紙の如き文書と全く同じ仕方、「どのような人々と対決して書かれたのか」との設問のもとに見るのは適当でないとする。つまり、新約聖書記者は、論争家であると同時に牧会者である事実を指摘する。

52 *Ibid.*

53 *Ibid.*, p. 318.

54 マルコの福音書執筆事情については、W.L. Lane, *op. cit.*, pp. 12-25 参照。

55 マルコにおける「家」の用例については、E. Best, "The Role of the Disciples in Mark", p. 400 参照。

56 この *Stakoufoi* を一章13節では天使、十章45節では主イエスご自身、十五章41節ではガリラヤから主イエスに従って来た婦人たちの行為として用いているのは印象的。

57 挿入がいくかに重要な役割を果たすかは、たとえば、ローマ人への手紙八章18-25節の例を見ても明白。八章17節までと、27節以下では救いの内容について説き明かす。そして、18-25節の挿入により、救いの恵みが、被造物全体との係わりにおいて、また、雄大な終末論的観点において提示されることになる。このように、挿入は、文脈から切り離し得ぬ重要な役割を果たす。

58 モーセの十戒の構造は、(1)唯一の、生ける、真の神に対する人の取るべき態度、すなわち真の礼拝と、(2)人が隣人に対して取るべき態度、すなわち礼拝の生活の両方より成り立つ。そして、「あなたの父と母を敬え」という最も日常的な戒めが、その中間にあつて、真に人間らしい人間の生き方の土台を示す。主イエスが、食べたり、飲んだり、着たりの日常生活との密接な係わりの中で、「神の国とその義とをまず第一に求める」生き方を指し示されるように(マタイ六章24-34節)。

59 パウロが、エペソ人への手紙六章1-4節で親子関係の基本を教えるに先立ち、五章22-33節で、夫と妻の関係をとり上げているのは、聖書の根本主張を示す。

60 創世記三章の罪の現実に先行する創世記一・二章の創造の現実を直視しつつ、聖書全体の構造を見渡す必要を明示。G. Vos, *Biblical Theology*, Grand Rapids, Michigan, 1948, pp. 11-51. 渡辺公平、『聖書は何を教えるか』、鷹書房、一九七九年、二

四一―二六頁参照。

61 J. Lambrecht, *op. cit.*, pp. 257, 258.

62 E. Best, "Mark III, 20, 21, 31-35", p. 318.

63 V. Taylor, *The Gospel according to St. Mark*, London, 1959, p. 435. H・シユヴァイツァー(高橋三郎訳)『マルコによる福音書』、NTD新約聖書註解刊行会、一九七六年、二九二頁参照。

64 それ故、「貧しさの中にいる道」ばかりでなく、「豊かさの中にいる道」も、「乏しいこと」ばかりでなく「富むことにも」、「あらゆる境遇に対処する秘訣を心得る」(ピリピ四章12節) 必要がある。そうでないと、コリント教会の一部の人々のような問題が生じる(コリント四章6-13節)。

65 主イエスの家族が主イエスに対し全く無理解であり、この個所で彼らの立場が律法学者のそれと同列に並べられているとしても、それで主イエスが肉の家族を軽視し、無視したことにならない。またマルコの記述も、主イエスに対する家族の態度を事実として描くのであって、主イエスが家族を拒絶したとは見ていない。

66 この点でも、主イエスは兄弟と同じ経験をなさる。ヘブル二章17節参照。

67 更に、パウロ書簡の家族関係についての言及なども、パウロ神学の周辺的なものではなく、まさに中核を占めるものとして考えられるべきである。

(新約教団青梅キリスト教会牧師)